

HOPE Bourgogne

ポンティニイの教会

私がポンティニイの修道院へ行ったのは、オーセールからである。ブルゴーニュ地方のロマネスクを見てパリへ帰る途中だった。オーセールから国道77を走って21キロ、小さな町のはずれ近く、通りから右手に入ると突然に大きな教会の玄関が目に入った。ロマネスク後期、1140年にそれまでの古い建物をこわしてあたらしくつくりはじめたものである。やや尖頭アーチになった八つの盲アーチのもと、中央に開口部とその左右に二つずつの半円アーチが薄明の内部を私にかいま見せてくれるのであった。半円形壁面も何もない。玄関

の屋根の向こうに巨大なやや尖頭アーチの窓があるだけで何の装飾もなかった。

この修道院教会はシトー会に属していたのである。真摯、内面性、深い均衡、ひそやかな勇気というこの会派の精神がこのポンティニイにもみちあふれていた。

創立当初から数百人の修道士がいたといわれるが、その大きさからして今日フランスに残っているシトー会協会のなかで最大というもうなずけるところである。クロード・ヴィエネルがあらわした『ポンティニイ』による歴史を少し辿り直してみたい。

この教会の特徴は「神の正義を守ろうと亡命した英国の高位聖職者」が何人もいたことで知られている。最初の人物はトマス・ベケットでカンタベリイの大司教であった。彼は、ヘンリーⅡ世の親友であったが、やがて王権が司教や教皇が行う破門と上訴を抑制し、聖職者処罰を主張したことと対立して教会法を守ろうとつとめた。6年間の国外亡命のうち、2年間をこのポンティニイで送った。しかし英国に戻った後、司教座聖堂で騎士に殺されている。次も同じく英国のカンタベリイ大司教になったエティエンヌ・ラングトンで1208年から13年にかけて国王ジョンの拒否にあり、ここに滞在、さらに1240年にも聖エドムが同じくカンタベリイ



文芸評論家
饗庭孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽の友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

大司教になるも王と争ってポンティニイに来ている。

この後、協会は『宗教改革』でプロテスタントに、18世紀の「大革命」では破壊を受け、その建物の石は村の修繕のために使われたりもした。しかし、今世紀になってポンティニイはポール・デジャルダンによって買われ、一種の精神的な文化センターとなり、彼の呼びかけですぐれたジード、シャルル・デュ・ボス、アンドレ・マルロー、ロジェ・マルタン、デュ・ガール、フランソワ・モーリヤック、アンドレ・モロワ、それにポール・ヴァレリイがあつまり、哲学、文学、社会問題を論じる知的会議の

場所となったことで有名となった。以後、修道院改革や青少年教育のヨーロッパにおける中心の一つとして機能している。その意味で広汎な影響力をもっている。

入口から身廊に入ると何よりも打たれるものはその白い純粋な内部のかがやきであり、それがつくり出す厳しい雰囲気である。わずかに白と緑の幾何学文様のステンド・グラスと、交差部右におかれた16世紀（一説には17世紀）の聖母マリア像である。彼女の長いマントの裾に、これを仰ぎ見て祈りの姿勢をもつ司教、司祭や庶民たちの人物像が心を惹く。ふし目勝ちの聖母マリアの微笑が美しい。この交差部はきわめてゆったりとしていて高さ16.5メートル、長さ58メートルもある。北の袖廊には床と壁面に階段と戸口の跡がのこっているが、それは、今は取りこわされているものの、かつて寝室からまっすぐ修道士たちが教会へ降りてくるためのものであった。

南の袖廊には、聖具室の戸の横に、司祭用の洗淨水槽が見えた。それにしても身廊の両側にある側廊の何と見事な均衡と採光の美しさであろうか。天井は交差穹隆で典型的なロマネスクである。陽のうつりゆきにに応じて影が白い内部に微妙なニュアンスを与えるのであった。それはシトー会修堂院建築において頂点に達した感がある。

白い純粋なこの空間は内部にここで祈りを捧げる修道士の心次第でいかようにも精神の求心的な姿が描き出されるような印象を与える。白は「無」であり、そこにどのようなものも容れうる自在な面であり、またつねに「精神」の出發を告げるイメージでもある。他の教会のように柱頭彫刻や壁画、綴織やきらびやかな聖具に心を動かされることなく、シトー会の原理がそうであるように、ただ「主のみを求め」る精神のカンバスがこの内部空間と言ってよい。

10世紀、11世紀のロマネスクは簡単なものからヨーロッパ周辺文化とのそれまでの影響もあり、イスラム、オリエントの属性が教会の一部分をなしていた。その時代がやがておわり、シトー会は直接的な主との関係にのみ心を向けるようになった。ポンティニの修道院はまさにこの会の「精神」の到達点を見せている。そうした感慨にとらわれながら私はこの建物をあとにした。ここはもうブルゴーニュ地方の北、パリも程遠くない。私は豊かな土地の風景を眺めながらパリへと帰って行った。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、田中



P.G.I. 15周年によせて

P.G.I. (フォト・ギャラリー・インターナショナル)は、日本でも数少ない写真専門のギャラリーとして1979年にオープンしました。この15年間に144回の写真展を開催し、121名にのぼる写真家の作品を紹介してまいりました。風景、ポートレート、ドキュメンタリー、スナップショット、スティルライフなど多岐にわたる内容の写真を取り扱っていますが、主に20世紀初頭から現在までの国内外の写真作品を専門としています。

写真は近代の技術が生んだ最初の芸術と言われていきます。写真術の誕生から150余年と、歴史はそれほど古くありませんが、その美しさは他の芸術作品に勝るとも劣らない感動を私たちに与えてくれます。一枚の印画紙の上に現わされた映像は、写真家の哲学であり、生命への問いかけでもあり、また芸術の限らない可能性を秘めているのです。私たちの展示企画は直接写真家と対話することから始まります。それは人と人とのつながりが何よりも大切なことと考えているからです。今後も写真を写真家のメッセージとしてとらえ、写真展を通してこのような魅力あふれる写真に対する理解や共感の輪を広げていくことに努めていきたいと考えています。

(15周年記念—上写真—を抽選で30名にプレゼント。添付の葉書でどうぞ。)

〔P.G.I.からのお知らせ〕

三好耕三 作品展「Southwest: 南西」

1994年6月2日(木)～7月15日(金)

三好耕三とは日本のコンテンポラリーの写真語るうえで欠かせない写真家の一人です。1970年からこれまでに、「Exposure」、「傍観」、「温室」など、一つのテーマや対象にしたがってシリーズとしての作品を創り出してきました。その作品は、東京国立近代美術館や東京都写真美術館などにコレクションされています。1991年から文化庁芸術家在外研修員として、アリゾナ州に滞在し、アメリカの南西部をとらえた作品を創り続けています。今回の展示では、アリゾナ州を拠点として撮影されたモノクロームの作品約40点を展示し、三好耕三によって生み出された映像の魅力を明らかにします。



©Kozo Miyoshi



フォト・ギャラリー・インターナショナル

〒105 東京都港区虎の門2-5-18 TEL.03-3501-9123